

第34回日本がん看護学会学術集会 国際活動委員会主催「がんゲノム医療時代に私たちにできることは何か？」セッションの報告とアンケート結果

2020年2月23日、第34回日本がん看護学会学術集会 国際活動委員会主催セッションにおいて「がんゲノム医療の時代に私たちにできることはなにか？～日米の現状から考える」というテーマで田村智英子先生（FMC 東京クリニック 医療情報・遺伝カウンセリング部／順天堂大学医学部附属順天堂医院 遺伝相談外来／ゲノム診療センター）にご講演いただきました。新型コロナウイルス感染症の影響を受けて限られた人数の参加者になることが予想されましたが、113人の参加があり、講演後も田村先生のもとに質問が続きました。がんゲノム医療では抗がん治療につながる情報を求めてがん遺伝子パネル検査を実施しますが、結果として子孫に受け継がれる可能性のある遺伝情報が明らかになる場合もあります。国内では、特に保険診療の場合、標準治療を終えた（あるいは終える見込みの）シビアな状態でがんゲノム医療に少ない望みをかけるような状況や遺伝情報が明らかになる可能性が生じるため、患者も医療者もそれらに圧倒されて萎縮している現状があります。一方、欧米では、むしろ情報を得て今後の検査のオプションを考え、賢く予防する方向へと進んでいるそうです。遺伝のことは遺伝の専門家に回す・・・ということではなく、遺伝情報を知ることでもっと大きな可能性や広がりがあるということを患者さんに伝える役割を患者さんに一番近い看護師に担ってもらいたいという田村先生からのメッセージを受け止めたいと思います。*講演内容は収録し、後日学会HPより配信予定。



講師 田村 智英子 先生

(FMC 東京クリニック 医療情報・遺伝カウンセリング部／
順天堂大学医学部附属順天堂医院 遺伝相談外来／ゲノム診療センター)

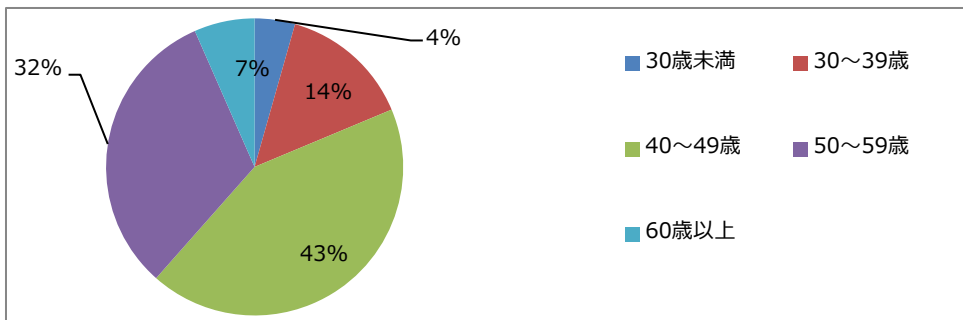
座長 川崎優子（兵庫県立大学看護学部）

参加者アンケート調査結果

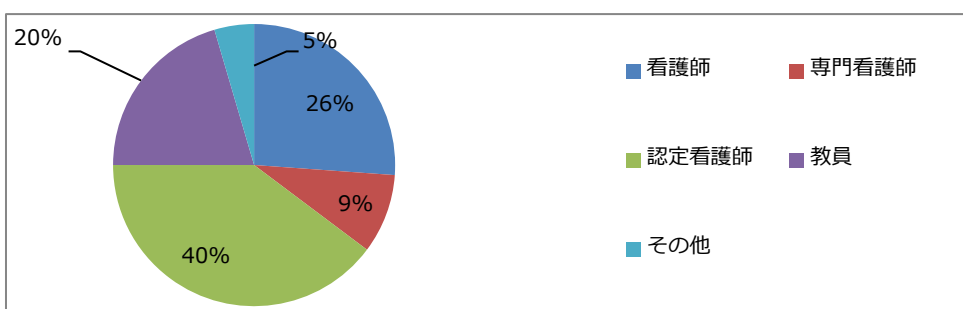
配布 113、回収 92（回収率：81%）

I：参加者の背景

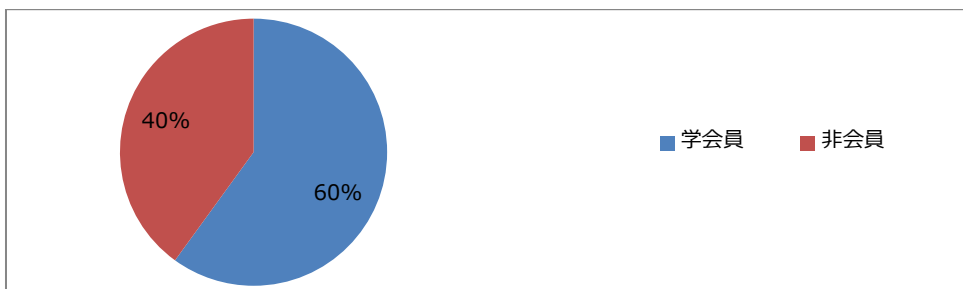
I-1：年齢



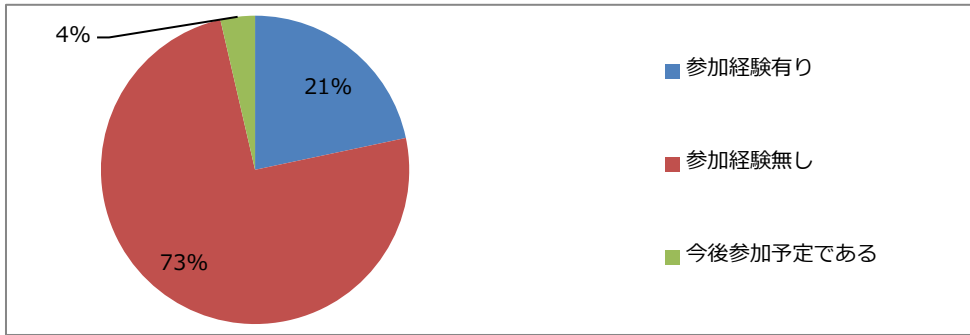
I-2：職種



I-3：学会員

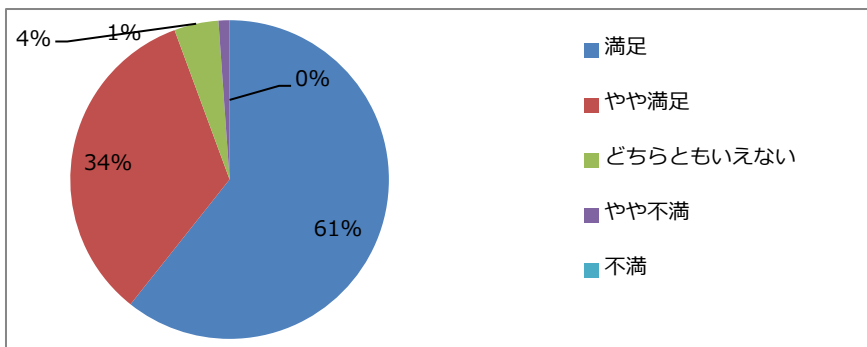


I-4：国際学会への参加有無



Ⅱ：講演内容

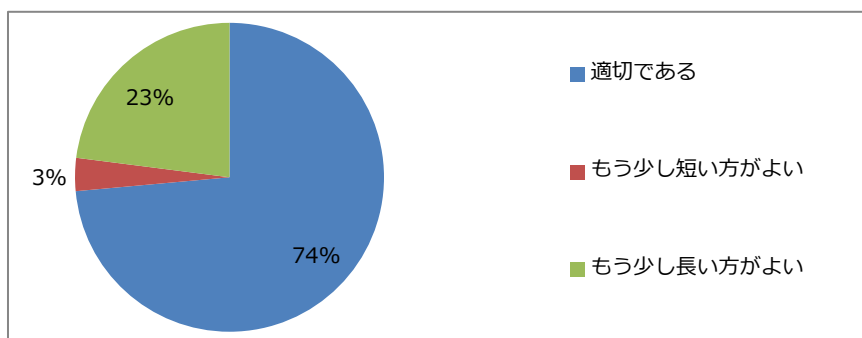
Ⅱ-1：満足度



Ⅱ-2：「やや不満・不満」と回答した理由

- ・ 見本的なゲノム医療についてわかりやすくお話しいただいたが、スライドの進み方が早く、もう少しゆっくり、じっくり学びたかった。
- ・ 話すペースが早すぎる
- ・ パワポ資料が欲しい。多くの情報、早すぎてメモをしているとついていけない。
- ・ もう少しゆっくりききたかった
- ・ できればもう少し長い時間でききたかった
- ・ 話すスピードが早く、ついていくのがやっとであった。
- ・ 不満ではないが、スライドお話のテンポが早かった。
- ・ 字が多すぎる
- ・ 内容をじっくりきくのに時間が足りないと思った。

Ⅱ-3：時間配分



II-4. 日本と欧米のがんゲノム医療の状況を比較して、感じたこと。

- ・ わかりやすくご講演いただきありがとうございます。正しく知ることの重要性を正確な知識をもって実践していくことの大切さを実感しました。
- ・ 胚細胞の遺伝子と、がんの遺伝子と日本人は区別がつかないので、知ることができれば、安心できるのではないかと思います。
- ・ VUS はいつ明確に情報がでるのでしょうか。また勉強します。
- ・ 「がん」に特化して有効に使うか、ここが日本は弱く、患者の方が様々情報を先行してしていることが多い。Ns がまだまだ介入で来ていない。
- ・ 米国の方が positive に捉えていると感じました。情報を活かす精神があると思いました。パネル検査（日本でいうところの）を受けるタイミングは日本と同様なのでしょうか？
- ・ 日本のゲノム医療はまだ始まったばかりで、どこでも出来るものではなく、費用が高い自費診療になるのでお金がないと検査もできないように感じた。何か社会制度がないのか？
- ・ 日本は皆保険がよいような、悪いような 個別検査をみとめられるようになると良いと思いました。また望むならどこでも●●できる 誰でも受けられるとよいなあと思いました。
- ・ 遺伝について 日本でもやっと調べられるようになってくると思った。また知ることです予防につながることを学びました。ありがとうございました。
- ・ 言語の違いもあるが言葉（患者への）使い方がまだ日本では統一されておらず、それがゲノム医療を難しくしているのではないかと感じた。
- ・ 日本でも日常的に遺伝のことが話せる。ポジティブにとらえられるようになればと思いました。遺伝について学び、少しでも日常診断に活かせられたらと思いました。
- ・ がんゲノム医療→言葉が悪いことが分かった
- ・ 大きな差はないと感じた。しかし、発信の（正しい）仕方や浸透が、もっと進めばよいのではと感じました。
- ・ ゲノム医療の未来が見えてきました。
- ・ 用語の違いについて、留意して情報を見ていく必要があると感じた。遺伝情報について

変なバリアをもたずに、ポジティブに通常の会話として話題にできると良いと思った。

- ・ お話をきくのは2回目で楽しみにしていました。
- ・ 日本ではゲノムはなかなか難しいイメージ。アメリカで Set でパネル検査をやっている。日本でできればいいと思う。
- ・ 政府の対応
- ・ 身近な検査として考えたいと思った。
- ・ ゲノム医療に難しさを感じていたが、もっと学びたいと思った。
- ・ カウンセリングができる研修を紹介して欲しい。講演の後に、座長が紹介していただいた。学会等を見てください。
- ・ 用語の意味の違いが、自分で勉強しているときにわかりにくく混乱するので注意としました。
- ・ 日本では言葉のみが先行して色々な誤解を一般人、医療者共に与えしまっていると感じる。欧米のように診療に遺伝の内容がむすびつくために我々がすべき課題が多く、より難しく感じる。
- ・ かなり勉強になりました。いろいろ学んでいてもあらたな気づきがたくさんあり、●●です。
- ・ 日本は遅れているのか混乱期にあるのだと思います。未だに私も先生の話の内容をきいても途中で申請等の正確な意味がわからない時があります。
- ・ まずはナースが遺伝子検査や遺伝とがんについて、もっと知識を身につけて、正しく情報提供していく必要があると感じました。
- ・ 大変わかりやすく興味深い内容でした。内容が盛りだくさんだったので3回シリーズくらいでもう一度じっくりとききたいです。
- ・ がんゲノムの現状欧米と日本を比較しわかりやすく参考になりました。
- ・ 日本では今は流行のような形でとらえられている感じがしています。適切な●●に役立つよう検査ができると有りがたい気がします。Pt にとって本当に必要な時期かどうかなど医師も最新の状況を知るべきだと思いました。
- ・ 日本はパネル検査で薬剤が見つかったとしても自費診療となることが多い。国も支援体制を教えているがまだまだ費用での負担が大きすぎると感じています。欧米では治療という点での負担軽減が進んでいるのでしょうか。
- ・ 扱う用語の意味合いが異なることを初めて知りました。統一した方がよいと考えましたが、そのためにどうすべきか考えていきたいです。
- ・ がんゲノム利用に看護師として何ができるのかについて基礎的知識をしっかりと聞けました。整理が少しできた。
- ・ 遺伝性腫瘍の薬剤などに日本との差はあまり感じられなかったのですが、検査に対するハードルの低さに違いを感じました。(リンチ症候群に対してスクリーニングが組み込まれていたり、パネル検査が日本より前から保険収載していたり。) 背景には医療者だ

けでなく国民全体もがんゲノム医療への関心、知識が高いのかなと感じました。

- ・ 一般病院であっても患者さんへ情報提供ができるようパンフレット等の準備が必要であると感じました。
- ・ ゲノムについて予防に有効利用するために活用するというのは新たな考えだと気づかされた。
- ・ 正しい情報を適切に患者さんに伝えること、サポート的に伝えることが大切だと感じました。

Ⅲ：国際活動委員会活動に対する要望。

- ・ アメリカのオンコロジーナースの活動をききたい。
- ・ 日本の素晴らしいところを知りたい
- ・ もう少しゆっくり
- ・ 今後も国際的ながんゲノム医療について情報提供してほしい。
- ・ “・ACPの海外の取り組みと日本の違い・地域（訪看や在宅医療）の違い、、、について知りたいです。”